

ルカ福音書の降誕物語には隠されたメッセージが布石のように置かれています。1章5〜25節までのザカリヤに起きた天使のお告げの意味は、御子イエスの先駆者としての洗礼者ヨハネの誕生秘話というスタイルをとりながら、読む私たちに神の摂理として自分の身に起こったことを黙って受け入れなさいと言っています。口が利けなくなつたザカリヤの逸話がそのことを端的に示しています。本日のテキストであるマリヤへの天使のお告げは、神の摂理がたとえ人間には分からなくても、それが自分に身に覚えがないことであっても、それに対してイエスと応えなさい。そこからしか理解しえない神の意思があるのだということの間接的に教えています。マリヤが『お言葉とおり、この身に成りますように』という言葉は、神の摂理に従うことを示しています。

さらにマリヤがエリサベトを訪ねる物語では、マリヤの言葉にエリサベトの胎内の子がおどつたというエピソードが紹介されます。それまで生きてきたマリヤの社会通念とはまったくかけ離れている事態が臨みます。許嫁と肉体関係がないのに、妊娠したという事態は石打ちの刑にされる侮辱の対象となる出来事です。しかし、聖霊の導きによって身ごもるという出来事がもたらされ、しかもその出来事は呪いではなく祝福されていることだということです。にわかには信じがたいことですが、そこに神の意思が働いていることが知り合のエリサベトによってマリヤに告げられます。

2章にはいると、イエスの誕生の場所はこの世の片隅です。羊飼いやはり、社会の底辺で生きている人々に対して最初に天使を通して神の意思が届けられます。そして、羊飼いたちは『さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか』(15節)と、幼子イエスに会うために出立するのです。

これらに共通していることは、この世の常識ではヨハネの誕生も、イエスの誕生も、それにかかわる人物たちも忌み嫌われるような事態の中に現わされるということです。この世的に見れば、できれば避けて通りたい出来事に彼らは遭遇させられています。けれども、それに対して、とにかく思いをはせる、不思議で理解できない出来事であり、自分にとつては不利益をもたらす事態なのだけれども、それに対して思いをはせてみることから、神の意思を受け止める道が開かれることを語っています。

1

「病者・花」(現代社)という詩集を出している細川宏という医師は若くして癌で召された方ですが、その詩集の中で『今日この頃の僕は、病苦の激しさに比例して、深さのある何かの中に生きています。奇妙な病者の錯覚か、それとも健康者の心は、水平方向に振動し、病者のそれは垂直振動するのかな。肉体的苦痛に比例した振幅の深さ』と書いています。病によって神と人間の関係性を象徴する縦軸で振れるということです。

縦に触れるという意味では、深刻な事態のなかにあつても、不思議な静寂の中におかれている不思議なときがあるという事実を示しています。混乱した心に、静寂な思いがもたらされる。そのようなことが、ザカリヤにもマリヤにもエリサベトにも神によって起こされたのです。

細川宏さんの文章をもう一箇所引いてみます。『君は僕に激しい苦痛と、言い知れぬ精神的苦痛、その他さまざまな致命的傷痕(傷の痕跡)を残したまま今去つていこうとしている。しかし、同時に、君は実に貴重なものをごの僕に教えてくれた。肉親や友人知人の数知れぬ温かい情けはもとより、苦悩そのものの中に働く不思議な癒しと救いの心の働きや、人間のいのちの尊さとその無限の奥深さ、その他もろもろのことを、おぼろげながら僕に教えてくれたのは君だ』と記しています。ここでの君とはもちろん癌のことです。

細川さんは健康なときは、その心は水平方向に振動するといっている。人間の水平方向は家族や友人、知人、隣人、同僚など外面的な世界しか目に入つてこないことをさしています。そこは社会的な規範があり、それを守らなければならない世界があり、たとえば重篤な病になることは不幸なことだと断じる常識があるせかいのことです。ところが、病気になるると垂直方向での振動が起こり、普段は気にかけていない(本当はやりすごしている自分の内面)自分の心の奥底に目がいき、精神世界を深く洞察することになるということです。そして、それが神に向かえば信仰の世界に入っていくわけです。

細川さんは、不治の病をもたらした癌によって、心の深みに降りていくことができるようにされたということです。その意味で、ザカリヤもマリヤもエリサベトも自分の身に起きた出来事によって存在の深みに降りていくことになったのです。天使が告げたにもかかわらず、それでも彼らが自分の水平方向だけの世界に固執していたならば、天使の言葉を振り切つたでしょうし、自分の身に起きたことを人生の偶然の不幸と嘆き悲しんで人生を終えたことでしょう。

自戒を込めて言うのですが、この世の中には騒がしく歩き回り、すべてのことが見えているように発言している人がいますが、実は本当のところ覚醒していない人はいるわけです。細川さんは人間存在としては修復できない癌という傷によつて、精神的肉体的な苦痛をもたらされたけれども、一方で、生きることの深みと自己存在の深みに降りていく営みに覚醒した人だといえます。

イエスのご降誕を覚えるとき、それにかかわった人たちは自ら傷つく営みを通して、自己存在の深みに降りていったのだと思わされます。そして、そのような人たちのところにまさに御子イエスは降ってこられた！のです。しかし、一方でイエスはこの世的な力が支配する世界に入つてこられたわけですし、この世の価値観からするならば幸せな人生ではないわけです。そのことは母マリアの人生をみてもわかります。この世的に祝福されたことは何も福音書では報告されていません。細川さんもこの世的な評価では、志半ばで癌に倒れたという評価を下されるでしょう。

私たちは神の摂理に組み込まれた人生を歩んでいます、それはこの世的には傷を持ちながら歩んでいるのです。しかし、その傷が縦に振動する世界においては、この世的に不幸なことに意味がもたらされることなのです。

イエスの誕生の予告が天使によつてもたらされるのは、ザカリアが神殿で天使に出会った6カ月後のことです。同じ天使ガブリエルがマリアのところに遣わされ、マリアが男の子を産むという予告を告げます。エリザベトとマリアは非常に対照的な年齢であり、対照的な生活をしてきた人物ですが、親戚関係にあった者同士です。

そのように宣言されたマリアがザカリアと同じように『どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに』(34節)と、彼女の告白の中にもやはり人間として当然わいた疑念が生まれました。しかし、エリザベトが高齢にもかかわらず、妊娠したという話を聞いて、さらに『神にできないことは何一つない』(37節)という天使の言葉を受けて、マリアをして『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように』(38節)と告白させるのです。

信じることができる前には、人間には必ず疑いの思いが口をついて出るものです。人間は信仰に至るまでの間の経験の中で必ず「疑う」ことを通して信仰に至ることがここでも表されています。

水平世界に生きている者は、自分の身の上におきた不可解な出来事、病であり、障害であり、挫折などの出来事は忌み嫌うものだと考えます。けれども、垂直方向の世界に覚醒させられると、その水平世界も相対化されて、不可解な出来事にも隠された意味があることに気づかされるのです。けれども、人間は水平世界か垂直世界のどちらか一方で生きることができませんから、どちらにしても水平世界で負った傷は残ったままになるのです。

疑わなければ、考えてわかるという世界には踏み込んでいけません。同時に考えてもわからない世界のことをいくら疑つても答えは出てきません。誰もが神が現実にも働いているし(現在)をこの疑いの中から目にして見たいと願うのですが、それを実際に見て確かめることはできません。だから、聖書は神ご自身が聞かれたり見られたりすることがないことを十分に知りつつも、それを見たことや聞いたことによつて語ろうとしてきたのです。古い時期のイスラエル人は神の現在を神が遣わす『天使』の口を借りて語り、この困難を克服してきました(創世記22章11〜19節、出エジプト期23章20〜22節参照)。

マリアもこの世に価値観から見れば、聖霊によつて身ごもったことに傷ついていました。しかし、疑っていたマリアも最後には『お言葉どおり、この身に成りますように』と仰つて受け入れます。マリアのこの決断は、考えてもわからない信仰の世界へは最後エイヤツと飛び込んでいくように決断するしかないということを示しています。洗礼も同じで、最後は飛び込んでいくしかないのです。そして、その前提になっていることは、神と自分自身のことは通常の世界観ではわからないということです。信仰の世界とは神と自分自身にかかわる縦軸のことなので、全部がわかりきってしまうことにはないのです。自分が分かることだけで決断していく人生も悪くはないのですが、わからないことは神さまに委ねてしまおうという決断がマリアの信仰として、ここで描かれているのです。私たちも、このマリアの決断に倣いたいと思うのです。